

コメント・質疑応答

司会(中澤)：小林先生から大変充実したご講演をいただきました。もう一つのグローバリゼーションがあるのだというご指摘から始まって、しかし、日本ではグローバリゼーションがまだまだ本当の意味では研究されていないという現状の中で、グローカリゼーションを考えていく上で北海道が独自の重要性をもつのだという問題提起も含めたお話をいただいたかと思います。

このご講演に関して、小内先生、玉野先生、内田先生からそれぞれ簡単にコメントをいただければと思っております。そのあと自由に討論するという形にしたいと思っております。まずは事実確認的な質問、あるいは言葉の意味について確認したいという方がいらっしゃいましたら、いま、二三いただいで、その後、コメンテーターの方からお話をいただきたいと思います。

西城戸：一番最後の方の話で、サルデーニャの失業者の社会的な抵抗力があるという事例がありました。これはイタリアの島嶼部に特殊な現象なのか、もうちょっと広い範囲で、イタリア南部などに広がる話なのか、ご存じでしたら教えて下さい。

小林：少なくともイタリア北東部やサルデーニャには当てはまります。一番根っこにあるのは、家族の持つ信頼が強いということです。例えば、ミラーノだと



小林 甫氏

かニューヨークだとかに息子が行ってしまうと、マンマが「何で私をおいていっちゃうの」と悲しむ。フランシス・フクヤマに言わせると、家族的な紐帯の強さにはマイナス面がある。家族しか信用しなくなる。家族の外の信頼関係が非常に薄くなるというわけです。しかしイタリアの家族は孤立した小家族で存在しているわけではありません。親族のネットワークとか、あるいは週末に家族で会うというのがけっこう多いのです。そして、マンマのいるところへ友だちを連れて来れば、家族に準ずる存在になる。家族以外のメンバーを信用しないというのは言い過ぎです。いずれにしても家族の紐帯が非常に強い。

家族構成で言えば、日本の家族構成もイタリアの家族構成も、統計的には核家族です。ただ、実際にその家族の具体的な存在形態を見てみると違うのです。日本もかつては家族の絆は非常に強かったのですが、高度成長時代に「田舎にいるより都会に行ったほうが幸せだ」と、都会へ子どもを出してやるようになった。それから随分と変わった。

司会(中澤)：ありがとうございました。他にご質問がなければ、3人の先生方からコメントをいただきたいと思います。小内透先生からお願いします。

小内(透)：この前、退官記念の最終講義を拝聴いたしまして、それと同じような話かと思ったら全然違う話だったものですから、驚いています。今日お話を聞いた限りでは、小林先生がこれからどんな研究をしていくのかということで、小林甫版のグローカルソシオ

ロジーを宣言されたと捉えました。これからつくるといことなので、色々質問してもきっとこれから考えていくというお答えになるのだらうとは思いますが、それを分かったう



小 内 透 氏

えで、いくつか質問ないし意見を述べたいと思います。

まず、「グローバリゼーション」の捉え方について。今日お話をされたことの一つの焦点は、中澤さんが言ったように、グローバリゼーションと言っても、新自由主義的な意味でのグローバリゼーションとは違う、言ってみれば反グローバリゼーションと呼ばれているようなグローバリゼーションについて、これが、ひとつの眼目だったような気がします。小林先生ご自身の言葉で語っているわけではないですけども、きっとそれらの議論に共鳴しておられるから、こういう取り上げ方をされたのだと思います。

グローバリゼーションと言っても実は二つの側面があって、その両者が葛藤したり対立したり矛盾をはらんだりしている。だから弁証法的なのだと、そういう捉え方になるのだらうと思います。ただ、それを受け止めたときに、本当にその2つの側面だけで捉えられるのかな、という疑問を持ちました。

この2つの側面というのは、ちょっと嫌らしい言い方になるかもしれないですけども、もともと布施さんが使っていた「資本の論理」と「生活の論理」のアナロジーで考えることもできてしまう部分のような気がします。「資本の論理」と「生活の論理」の二つの論理で社会を捉えることができるのか、という疑問は、きっと最初の頃から出されてい

ました。小林先生も、実際に表に出されたかどうかは別にして、内在的に批判していたように思っていました。それにしては、結局同じような図式になってしまっているのではないのでしょうか。

いくつか地域の研究を例に出しておられました。それらを見てみますと、グローバリゼーションの中でのまちづくりとか地域づくりとか村おこしとか、そういう事例を並べられると、結局これはどっちに入るのだらうか、という疑問が出てきます。ある意味では、新自由主義の競争に打ち勝つために、したたかに立ち上げた、グローバリゼーションに対抗する戦略、という言い方になるのだらうと思います。

ただ、それは新自由主義のなかのグローカリゼーションの範疇に入ってしまうという捉え方も出来る。もう一方で、それに対抗して生きていく反グローバリゼーションの運動だという考え方もできるかもしれない。しかし、ちょっとどちらにも当てはまらないのではないか、というイメージがするわけです。これが1点目。

そこから2点目の問題が出てきます。「グローバリゼーション」という言葉を使った本がいくつか出てきているけれど枕詞に過ぎない、という言い方をされました。これは問題への接近の仕方によるのではないかと思います。

グローバリゼーションという現象をワールドワイドな視点から見ていくと、きっと今日の前半のような話になってくるのだらうと思います。ただ、地道にというか、地域に即して、ローカルに即して調査研究していこうとしたときには、その視点からでは迫れない。やはり下から迫っていかないと、実際の調査はできないと思うのです。

そのときには、依然として、生産とか労働とか生活とか、そのレベルから地域社会の実態を見ていくということが必要なのだろうと

思います。そこから見ていったときに、生産や労働や生活の姿のなかでうごめいているものが、新自由主義的なグローバリゼーションに対抗しようと言っているけれども、結局そちらのほうに行ってしまうのか。そうではなくて、本当に反グローバリゼーションの運動につながるのか。そういうかたちで、グローバリゼーションとの関わりを見ていく方が、実際には生産的なのではないのでしょうか。

夕張の調査をやったときにも、夕張の石炭産業が衰退してくるのは、グローバルな経済の影響だっていうのは明らかだった。それは小林先生も書いている。三菱の調査や倉敷の調査をしたときも、当時もう既に三菱自動車関連の下請けまで含めて海外に進出しているという話がありました。地域から見ていけば、グローバリゼーションの影響が出ているというのは明かです。ところが、小林先生が最初おっしゃったような、すごく大きな、ワールドワイドな視点からのグローバリゼーションという視点から見ていけば、きっと具体的な地域の調査までは行き着かないと思うのです。

3点目はこの話の流れからちょっとそれるような気もしますが、布施グループの話になります。結局布施さんが重視していたのは、「生産・労働—生活過程」という概念。そこで大切にしていたのは、その「精神」だと思います。本当に詰めていったときに、そんなにすごい理論化ができていたかということ、そうではない。きっと小林先生も酒井先生も、もともとメンバーだった人たちもそう思いただろう。ただし、生産や労働や生活に注目しながら日本の社会を見ていこうという、この精神は今でも大切にしたいと思う。

基本的には、地域から積み上げていって、グローバリゼーションが進行している世の中で、生活や労働や生産にどんな影響が出てきて、それに取り込まれようとしているのか。あるいはそれとは反対に、対抗しようという

動きが広がっていかうとしているのか。そういう観点で、グローバリゼーションとの関係を見ていこうとしている。少なくとも僕は、そういうかたちでやるのが、合理的というか、生産的なんじゃないかなと思うのです。

今日の報告の前半のような大きな見方をされると、うわぁ、視点が大きくてすばらしいなぁ、という見方もできるのですが、だけど実際どうするの?という話になったときに、やはりなかなか難しい。実際に分析をしていったら、結局昔と同じことをやっているのではないか、と言われてしまうかもしれません。もっとも、対象自体がグローバリゼーションの中で変わってきているところもあるので、当然変わっていくだろうと思います。

司会(中澤)：ありがとうございました。次に、都立大学の玉野先生お願いします。

玉野：都立大学の玉野です。小内さんがオーソドックスな反応をしてくれたので、私は安心して、少し横道にそれた発想を述べたいと思います。



玉野和志氏

私個人のことで申し訳ないですが、グローバリゼーションというのは80年代以降日本の社会学の中で非常に議論されていくわけですね。私は少し古いタイプの社会学者ですから、それが大嫌いだっただけです。

何年前かに地域社会学会で、当時の若手を中心に、グローバリゼーションについてのシンポジウムをやって、小林先生をお呼びしました。そのときに小林先生が、企画した方の趣旨に合っていたかどうかは分かりませんが、一人異彩を放った報告をなさったのを思

い出しております。

今日の話もグローバリゼーションと聞いて、私はいつもの通り嫌だなあと思いながら来たのですが、やはり随分違っていて、ある種の安心をしながら率直な感想を述べたいと思います。

結論としての趣旨が小林さんの趣旨とどう噛み合うかどうかは後で議論ができればと思います。私個人としては、グローバル化とかグローバリゼーションとかいろいろ言っているけれども、社会学の現状では、それらは枕詞になっているだけであって、社会学全体をグローバル化からグローカル化へという流れの中で考え直すような契機はまだ現れていないのではないか、というのが趣旨であったようにお聞きしました。

その時に、先ほど述べた僕自身の違和感について言えば、グローバリゼーションというのがうるさくなってきてから、実は日本の社会学の問題提起のあり方というのはかなり変わるのです。変わるのだけれども、社会学としてどうかというところは、すっきりしないところがある。僕は、小林先生はそこを突いているのではないかと勝手に理解したのです。

僕自身は非常に納得できたことですが、ひょっとしたら違う視点から見ると、小内さんが最後に言っていましたように、全然変わっていないではないかという話になるかもしれません。最後にイタリアの例が出てきて、若い人が失業してもそれでも都市に行かないで残っているというところに、実はグローカルな時代に注目しなければいけない社会学的な知見があるのだ、という話に最後落ち着いた時に、僕自身はある意味で非常に分かりやすかった。

なぜかという、僕自身は、グローバル化というのを枕詞のようにして、単純に導入することによって、今まで日本の社会学がやってきた問題を安易に流してしまったという

80年代以降の日本の社会学の状況を、非常に気持ち悪く思っているからです。小林さんは、実はそれはグローバリゼーションやグローカル化ということを本当に位置づけた新しい社会学になっていないからそうなのだと批判された。そういう批判に耐えうるような、グローカル化に求められる社会学とは何か、という点を突き詰めていったとき、実は、小林さんが挙げた最後の例は、僕に言わせれば古典的な日本的な社会学の知見であるというふうに見えるわけです。

つまり、地方と中央と呼ばれた、旧来からの近代化論の中での問題設定。勿論それに対しての評価の仕方は全然違いますけれども、しかし追求していったものはなにか同じところに落ち着いていったのかなという感じがします。多分その評価の仕方が今までと全く違うような形で社会学を考えなければいけないという地点に来ている。それが、グローバル化あるいはグローカル化の今の社会に必要な社会学の問題前提になっている。そこで、受け継ぐべきものは全部受け継いだ上で、その意味づけとか問題の立て方とか評価の仕方とかをガラッと変えた社会学にすべきであると言われたのかなと、僕はそういう風に勝手に理解をいたしました。

そういう意味で、確かに今の日本の社会学がグローバル化あるいはグローカル化の時代にふさわしい問題の立て方になっていない。それでは、グローバル化を枕詞にしている人がよくやるように、まったく違う分野や方法や議論を持ってくれば新しい社会学ができるかという、そうではない。

60年代までに積み重ねていたような、その図太い伝統がある。僕自身も、布施軍団と言われたりした学派から学んだわけですけども、そういった伝統が培ってきたある方法なりある対象なりは、同じように活用できるのであって、ただその位置づけ方、問題の立て方をちょっと変えていかなければいけなく

なってきたということをおっしゃっているのかなと、私はそういう風に解釈しました。

労働過程、労働過程と言ってきたけれど、そうではないのではないかと最後にちょっと述べられていたのが、非常に印象に残っております。同じような学派の中で同じように調査し、研究をしてきた人のなかに、鎌田とし子さんという方がいらっしゃいます。あの方が、日鋼の争議を調査した最後に「日本では労働者の子どもは労働者にならない。ホワイトカラーになってしまおう」と指摘している。そこに、日本の労働運動の特色・大きな違いがあって、どうも今までやってきた労働者というイメージでは、なかなか今は難しいのかなと。

やはりここにも、ちょっと感想めいてお書きになっている。僕は小林先生にしても鎌田さんにしても、そのちょっと述べた言葉をこそ、中心に持ってきて社会学を組み直してほしいと思うのです。その辺ですごく安心すると同時に、非常に考えさせられる話だったかと、かなり手前味噌な形で理解させていただきました。私は弟子筋でも何でもありませんから、その辺少し違いがあれば、是非いろいろ議論させていただければと思います。

司会(中澤)：ありがとうございました。それでは最後に内田先生お願いします。

内田：実は私自身も北海道社会とは何かという問題を考えていない立場にあって、この問題に関心をもっているというのが一つと、もう一つは東北社会とは何かとか沖縄社会とは何かという問題との比較の中で北海道



内田 司 氏

の特徴を浮かび上がらせようというかたちで、仕事を進めてきたというのがあります。

グローカリゼーションというものを、北海道から考えるというときに、どう考えたいのかという視点で発言させていただければと思います。グローバリゼーションとローカリゼーションが実は結びつかないのだという議論があると思うんです。

西垣通（東京大学大学院情報学環教授）さんが朝日新聞に次のようなことを書いている。「ミーム」つまり「文化遺伝子」の概念を使って、グローバル化の中でローカルの多様な文化がもてはやされてきた。しかしグローバル化のなかで相対主義に陥るという罠にはまってしまっている。実は混沌とした状況を作ってしまったいて、なんら対抗軸になりえていない、という議論をしている。

さらに、グローバルなものと同ローカルなものを、「文明」と「文化」という対立として捉えて、その対立は深刻化しているとも言っている。普遍化で広がっていく方が文明で、急速な地球環境破壊のためにかつての輝きを失ってしまった。そして、文化は文字通り相対主義の罠にはまって、価値の指針を失ってしまった。だからグローバル金融経済が猛威をふるう中で多様な固有の文化と言ったとしても、有効な批判として機能していないではないか。西垣さんはそのように指摘している。この二つを、小林先生は今日の報告でグローカリゼーションというかたちでつなげようとしているが、それはどのようにして可能かという問いに答えなければならないと思います。

今日の論点の一つは、文明的なグローカリゼーション、これはトヨタを例として挙げられましたが、その上でそれと違うグローカリゼーションとは何か、その中で北海道社会とは何か、という問題を真剣に考えておきましょうということだと思います。

実は私は、きっと小内さんとは議論が違っ

てくるかもしれないですけど、地域社会研究の方向ってというのは、かなり大きく変えていかないと、そういう地域社会変動というのを解明できない局面にあるのではないかと、従来のオーソドックスな方法を、例えば理論的に積み重ねていくだけではだめなのではないかという問題意識を持っています。

地域社会研究は今まで都市であるとか農村であるとか、ある限られた北海道の空間であるとか日本社会であるとか、先ほどの例でいうと、鈴木榮太郎などもそうですけれども、そういう限られた空間を対象にしてきた。例えば北海道のなかの農村と炭鉱地域と、そして漁村と農村と、いや実は都市もあるかな、というところでモザイクのようなところを点々と歩いてきたわけですが、それを寄せ集めたのが北海道社会になるのかと言えば、私はそうではないのではないかと考えている。

では、先ほど言ったように東北と北海道と沖縄を比較して、一言で北海道社会の特徴は何か。地域間比較の視点で見たときに、北海道の特徴は、これまで積み上げてきた社会学的知識を踏まえて言う、北海道人は北海道社会をネイションとして作り得た歴史・経験を持たないという点にあるのではないかと思います。先ほど小林先生も沖縄の近代化と北海道の近代化とは違うとおっしゃった。私の言葉でいうと、沖縄は、やはりネイションで、一つの王国を作っていて、それが日本に組み込まれていったという歴史をもっている。それに対して、北海道はまさしくそうではない現われ方をするわけです。その意味でやはり、北海道と沖縄というのは、日本政府・中央・地方というレベルでの地域間の問題を考えても、かなり異なった歩みがある。

ですから北海道においては、日本の中央政府との関係、ナショナリズムというのは沖縄とはまったく違う現われ方をする。北海道のナショナリズムとは何かというと、帝国主義です。近代化をすすめた国家の国策を、万々

歳と手を挙げながらそれを支えていく。土肥昭夫さんという方が、北海道のフロンティア精神とアメリカのフロンティア精神を比較して、北海道にはフロンティア精神がなかったという議論をしています。北海道人の感覚としては、厳しい自然と向かい合って切り開いてきたというのがフロンティア精神です。しかし、アメリカ的なフロンティア精神、つまり、本国政府から自立・独立した政府を立てて、平等に向かい合うという意味でのフロンティア精神を大事にする国からいうと、北海道はそういう向き合い方をしたことがない。東北にも、もっと歴史が遡りますけれども、奥州藤原時代がある。それぞれの地域のなかで、地域的な領域は別としても、やはりそういうネイションがある。

イギリスの経験でいうと、ネイションというのはイギリス国民ではなくて、スコットランドとかウェールズのことです。つまりナショナリズムというのはスコットランド議会の独立運動である。イギリスはネイションズなのです。だから一つの国、つまりステイトとネイションというのは、全然重なり合わないのが当たり前である。しかし日本では、無前提的に、地域社会と国民社会とがステイトのなかの一員であるということで重なるということが前提になってしまうわけです。その点でいうと、地域社会研究において、日本をネイションズとして考えないといけないのではないかと考えているのです。

そこでグローバリゼーションとは何かというと、地域固有の文化を基礎にしながら、しかしそれは閉じられたものであるとか、グローバリゼーションに対してローカル、イスラムの原理主義なんかそうだと思うのですが、それを拒否して自分の文化を頑なに守ることによって自分たちの生活を守るというのとは違う、他の地域との関係性に開かれているというような方向性のことなのではないでしょうか。それぞれの地域の人たちが、そう

いう地域の統一体としての国民社会の形成をしながら、この日本という国のなかで歩み続けるような歴史を持ってきたかどうか、ということが大事なのではないかと思う。

残念ながら北海道の中でそういう思想的営為をした人はいません。沖縄では伊波普猷という人が、沖縄学の父と言われていますが、まさしく、日本に組み込まれながら、沖縄を何としても独立体とするローカリゼーションで頑張った人とは違って、島津藩の奴隷制から解放されて、日本の同じ政治のもとの一員となることに喜びというか解放性を感じながら、しかし固有の沖縄の文化を守る、中央政府と地方のありかたを考えるとということで、かなり苦勞しながら、沖縄学という形で思想的営為をやってきたのです。実は東北ではちょっと遅れて、グローバリゼーションの中で「東北学」というものが出てきた。では、それと同じような形で「北海道学」というものが可能なかどうかということが問われると思います。

こうした視点で見ると現在のグローバリゼーションとは何かというと、近代的な国家という、他の地域と結びあう主体単位が相対化されてきてしまったのではないか。まさしく、一人の市民でも世界的な規模でネットワークをつくるということが可能で、しかも金融資本のグローバル化とは違う、新自由主義のグローバル化とは違うローカリゼーションで結ぶことができるのだと思うわけです。つまり国家を媒体にしなくても、例えばフェア・トレードなんかはそうだと思うのですが、直接現地の人たちとの取引をしながら、その地域の人たちの生活を助け、自分の生活も成り立っているような関係性を個人でも作ることができる。

しかし北海道や沖縄や東北を問題にしたときには、そういう単位の地域が、個人とかの社会運動体と違って、自立したひとつの政治的な統一体として、他の地域の人たちと、新

自由主義的ではない関係っていうのを結べるような主体、そういう単位になりうるかどうかということが問われるのではないのでしょうか。北海道では、個人であるとか自治体であるとか、さまざま出てきていますが、北海道の単位で、そうした自立的な社会形成というのは、残念ながらまだ望めない状況だと思います。そこを小林先生はどう考えられているのかなと思います。

同時に地域社会研究に関して、布施先生がやってきた先ほどのようなモザイク的な地域間関係の視点、つまり、農村をやり都市をやり、それらを積み重ねて、結果として北海道社会の特徴という形で何かまとめられたものが出てくるのだろうか、という疑問がある。しかも、労働生活過程という視点で、アトランダムに地域に行きつめてみる。労働者の人からインタビューをする、ホワイトカラーの人からインタビューをする、そのようなインタビューを積み上げることで、北海道社会におけるそうした意味での社会形成であるとか、他の地域との関係の構造変化であるとかを、本当にとらえることができるのかどうか、という点で言うと、私自身はかなり疑問を持っている。

どうにかして、そうした社会形成や社会変動をとらえることのできる対象の設定や調査の設定をしなければいけないのではないかと、と思っています。実は小林先生はそれを気付かれていて、しかも北大に在職中にはできなかったのですが、その後やってみたいということ宣言されたのではないかと、というように今日の報告をお聞きしました。その点について、地域社会学の研究、方法と視点、課題の設定のところで、もう少しかみ合った形で議論できると楽しいなと私自身は思っております。

同時に、小林先生は、生涯学習論から見たとき北海道は総括としてどんな社会になるのか、沖縄の社会とはどう違うのか、東北とどう違うかたちで小林先生は捉えられたのかを、

教えていただければありがたいと思います。

司会(中澤)：ありがとうございました。では小林先生の方から今のコメントに対してリプライをお願いします。

小林：さっき鎌田とし子さんのお話がありましたが、〔鎌田哲宏・鎌田とし子さんの『日鋼室蘭争議三〇年後の証言』、1993年に出てくる〕日鋼争議の中心人物・松山照さんは、僕の母親のイトコなんです。母親の兄は日鋼争議で首になったのです。その後の生活も見たり聞いたりしてた。ですから他人ごとではありませんでした。その点から見ると、『証言』は労働者文化の一般性に一挙に行ってしまったという感じがしました。日鋼室蘭の人たちが持っている特殊性というのはあんまり考慮されていないのではないかと。

日鋼というのは、基本的に軍需企業ですから。ベトナム戦争のときも、直径1メートルくらいの大砲を作っていた。僕のいとこが代替わり（父親の退職と入れ替わりに入職）してその会社に入って、そのころ職長やってきました。大砲を作っていたんです、良いも悪いもなく…。そうした伝統を日鋼室蘭はずっと引きずっている。ですから、労働者文化一般というのはなかなか言えないんじゃないか。〔註：僕の父親は戦前は職人で母親の兄と一緒に仕事をしていて嫁に貰うことになったそうですが、戦後は三菱重工業に入りました。この会社も軍需物資の生産をしていました。組合も炭労などとは大違いでした。〕

実際に調査するときは、生産・労働—生活過程という形で調査票を作る段階では、布施さんと細かい部分では議論になった。大きいところでは変わらないのですが、問題は調査結果の解釈ですよ。どういう文脈でそれを捉えるか。その解釈のところで、内田さんがおっしゃったような、或る限られた枠の中でそれを組み立ててみながら、実際そこに生

きている人の感覚とは違っているかも知れない、という危惧をずっと持ってきた。特に社会学は言葉の解釈ですから、聞き取りのところで、相手の中で言葉がどう認知されてどういう言葉で返ってくるか、そこがブラックボックスになっている。そのブラックボックスのところをよく考えたいというのはあるかもしれない。

それでは、まずは面倒な質問から。「北海道社会とは何か」ということに答えを出してみるとどうなるか。沖縄社会とか東北社会を見るときには、共通の文化的紐帯があるのでしょうか。東北だったらアテルイから始まった抵抗の歴史。その感覚を共通項に持っている。「東北」と言ったときに、地理的範囲が思い浮かぶのではなくて、あの人この人あの文化この音楽といったような、あるいは方言とか、そういうところでつながる。僕の母親は弘前で生まれ育って東京に嫁入りしましたが、一生かかって隠したかったのが津軽弁。それを人から突かれるのが一番嫌だったみたいです。逆の意味で言うとそれだけ東北的な或る言葉遣いとか、言葉に潜んでいる感覚だとかがあって、愛着を持っていたのではないかと思います。北海道弁ってありますか？ 道南に行くときあります。道南の北海道弁。小樽弁もあるのです。それは釧路へ行っても、稚内へ行っても共通の、浜だったら共通しているものかも知れません。しかし、それは、浜に住んでいるから、東北や北陸から持ってきた言葉が使われているだけです。

アイヌは統一的な社会形成をしなかった。そのことは言語形成も統一できなかったことに関係すると思う。その後に和人が入ってきて、アイヌと共生する社会を作り得たかという、そうではないですね。一方的に縦の関係があって、明治政府ができた後も同じ。むしろ強化される。それに、道外のあちこちから逃げてきた人、ここに来れば何かいいことがあるかもしれないと思って来た人が来て、

それから3世代、4世代が経って、いま、他の地域と違った北海道独特のものの考え方、見方、感じ方、食の好みなんかが、作られてきているか。それがあればいいんですけど、なかなかそうはいかない。食の好みや生活のリズム感はあるかもしれませんが、

生産・労働—生活過程の調査をずっと克明にやっていくと、北海道人が、北海道という空間に住んでいる人間たちが、或る文化を作りあげていくありさまが見えるかといったら、見えないのです、それだけでは、ということ、実際に聞く項目はたいして変わらないにしても、組み換えをして、さらに解釈の仕方も変えていって、そここのところを見なければいけないと思います。

現実には、「内地植民地」とか「内国植民地」とか呼ばれているような役割を、北海道がずっと果たしてきたのは、いつまでか。いまもそうなのかもしれないけれども…。それに対して、そうではない、沖縄や東北、あるいは北陸がいまあるような在り方、そういうことをモデルにして北海道を考えていけばいいのかと言うと、そうはいかないでしょう。何百年という歴史の違いがありますから。

そうすると、ここに住んでいる人たちは、長くて重たい過去のシガラミを引きずってはいないという特徴をもっている。それはアメリカだとか、サハリンや沿海州だとか、カナダだとかと同じなのかどうか、ということにもなる。明治以降、この島に住んでいる人たちが、余所からどういう文化を引き継いできて何を残していったのかを、宮良さんたちの生活文化研究は衣食住の研究を中心になさいましたが、衣食住だけではなくて自分の生活をどう位置づけるのかを、もうちょっと抽象化していかないと、北海道は捉えられない。

グローバル化とかグローカル化とかいったような現象は、ステイトとネイションを分けて、ネイションの中をまた分ける、生活の近さというか類似性というか、逆にそういう視

点を入れることによって、労働—生活過程を調査しながら、それに纏わりついているいろんなものを、いろんな調査で中心ではないとして切り落とされたものを見してみる。そうすることによって、「資本の論理対生活の論理」を見ていく。

「資本の論理」はけっこう明確です。でも「生活の論理」は、“誰の？”という部分が離れないのです。炭鉱一つ見ても、階層によって見方が違ってくる。たとえば、炭鉱社会というのは労働組合と創価学会のもの凄い対決が行われてきた社会なのですが、そういうところで、生活の論理とは何かというと、「資本の論理ではないもの」としか説明が付けられない。

「生活の論理」の根っこが生産・労働—生活過程だというのは、小内さんが言うように、「精神」なのです。実際に生活過程がどう分析されたの？というところを見ると、生産・労働過程分析と抽象的に括る前の、具体の分析の方がずっと面白いのです。労働過程分析は僕が背負っていたのですが、労働過程というのは非常に複雑です。どういう種類の労働かということを抜きにして労働一般を議論すると、たまらないことになる。そういう意味では、「資本の論理」だけでいい、ということを行っているのではない。人間というのは必ずそれに対抗するものを持っているはずで、それを明らかにするのが生産・労働—生活過程分析である、という「精神」です。

方向性としては間違っていないと思いますけど、そういう方向性が打ち出された直後から、生産・労働—生活過程と機構—構造変動とはどう結びつくのか、切れているじゃないか、という疑問が出てくる。そういう点では、富永健一先生の行為論と変動論も切れていると思っていますけれども、これを、「精神」の部分に止めないで、「社会」としてどのように繋げるかというところに、いま一番の関心があります。

例えば、アダム・スミスが上流の人たちに對して「われわれの地位の人間は感覚が違っているだけでなく、生活の仕方が違っている」という言い方をしている。意識が違っているのではなくて、それを支えているところの生活の仕方。もっと言えば、生活を支えているところの、社会的習慣のあり方。社会関係の差異を明確にしていけないとダメだということがあります。

グローバル化がどこにあるかという、いまここにある。いまの北海道社会の中にある。間違いなく、経済的な形で押し寄せてきている。ただ、そのことをそういうように受け止めなければ見過ごされてしまう。以前通りの生活の仕方をしていけばいいのだ、と思えば済むかも知れない。ただし、その代わりすごく大きなことを見落としているかもしれない。こうした視点を「精神」の問題にしないために、社会学の本流の社会集団のところで問題を捉えていくために、あえてグローバル化を持ち込んできたわけです。

玉野さんが高すぎる評価をしてくださったために、逆に手足を縛られてしまう形になりました。日本社会学の歴史に對し、僕はこの頃、高田保馬を読んだり、鈴木榮太郎を読み返したりしています。高田さんも「戦争中の言動」だけでぱったり切ってしまうのはどうか。高田さんもその師匠の米田庄太郎さんも、ウェーバーとかデュルケムの線で社会学を見ていた側面もあるけれども、それ以上にジンメル線の線もある。人と人がどうつながって、社会を作っているか。その発想が鈴木榮太郎にもしっかりある。そういう日本の社会学、もちろん柳田国男や有賀喜左衛門も含め、日本社会学が作ってきた歴史的成果について、日本の社会学者が低すぎる評価しかしていないというふうに思っています。

僕たちの財産目録の中にどういうものがあるかということについての評価が、あまりにもなさすぎる。そうして新しい物こそが良く

て、古い物はもうだめなのだというような、つまり新しい物を旺盛に横文字で読み進めていく人たちがどんどん社会学のリーダーになっていく。まるで明治時代じゃないか！社会学の成果目録の中に何を入れるか。その成果目録を今の時点に立ってどう評価しなおすか、ということはたいへん大事だと思っています。そういう評価目録集としての社会学事典があればありがたい。

ベックが言ったことがどうなのか、というのが一番気になっています。さっきも言いましたようにギデンズと一緒にしてしまうのでは粗すぎる。ベックは、まだ楽屋の本当の裏側までは見せてくれていない。ただ、グローカリゼーションはいま、ここでの話だというとき、例えばミュンヘンで家族の研究をしながら階級の新しい意味を探るときに、調査項目の大変更が必要になる。調査をした結果の位置づけの変更を含むだけだ、とは言い切れないだろう。つまり、新しく調べなければいけないところがあると考えています。それが一番最後に幾つか列挙したところのものです。「生産・労働—生活過程」調査でいくと、それは「正常人口」の「正常生活」を扱ったものになる。そのなかに「日本人の」という限定が入っていました。日本人以外の人たちが持っているものに対する、例えば、在日の調査なんていうのは入っていなかった。アイヌの調査も（布施先生は前にやりましたが）。

イラク派兵問題を絡めて、基本的な議論をしないままに「外国への貢献はいいことだ」として、派兵してしまったのは非常に恐ろしい事態です。12月にイギリスから或る人が来て議論をしたのですけれど、日本と北朝鮮は未だ太平洋戦争の平和条約を結んでいない。ソ連とも結んでいない。韓国と日韓条約結んだのが1965年。ヨーロッパでは考えられないことを私たちの政府はしている、と指摘しました。

そのことの持っている責任が、例えばベッ

クの議論だとかハーバーマスの議論の大元にありますが、日本の社会学者の議論の大元には、こういった国民国家、ネイションズのありかたと関わっていく側面を、〈高田保馬のようになりたい〉がために、落としてきたのではないかと、こういう発想での検討が有り得たと思っております。

そういう意味で、社会学は、生活の細部を書き上げて、そこから生活者の全体、生活者の作る社会機構の積み上げ、それを通して経済機構や国家機構と対抗したり対応したりを分析するといった、「生産・労働—生活過程」と「社会機構—社会構造変動」という図式では解きえない問題が入ってきているのが現在である。それを解いていくためには、社会学者はどういう方法を新たに身につけなければならないのか、それが大元にあると思います。ですから、グローバル化を言えばそれまでやってきたものがみんな下らなくなる、などとは全然思っておりません。

小内さんが最初に言われた「グローバル・ソシオロジー」を自分で書くのかという問いについて答えれば、要するに、経験の蓄積がないから書けないわけです。日本人がそういう問題について取り組んできた経験が豊富にあって、それを総括する形で書かれたのではなくて、ベックがどう言った、ギデنزがどう言ったということを言っている、こういう報告ではダメなのです、本当は。そういう日本国民の経験が本当にないかどうかというのは、国際交流をやっているNPOだとか、そういうところをもっと詳細に調べてみて、そしてどういう経験が日本の中に積み上がっているかを考えてみたいですね。

例えば、NPOをやっている人たちの生産・労働—生活過程を調べるときに、同時に公的なところで仕事をしている人たちの、公的な仕事とは何かということについての議論が必要になる。そうすると、北海道庁のお役人たちがやっている日々の労働—生活過

程、つまり行政行為は一体何を目的としてやっているのか、それに対して「統治現象」はどうなっているか、ということは北海道社会論の大きな課題になる。

道庁や道教委とは1996年以降いろいろ付き合っていて見てきたのですが、少なくとも広い意味での教育に関わる側面では、公的な仕事における公共性に関する議論は行政の内部においてほとんど出てきていない。或る目標が明確にあって北海道の生涯学習を作っていく、という形になっていない。そういう点で言うと、北海道社会はどうあるべきかという議論において、歴史的蓄積としてはこういうことが共通課題として確認されていますよ、共通の課題はここなんです、などという形の議論、また議論の積み上げがないのが特徴のような気がする。

それを、山口二郎さんたちが「地方ガバナンス」という側面で扱おうとしている。それは行政官の行政の仕方の、行政の考え方の関連性を追いかけていこうとしていますから、社会学とはけっこう関連性は出るのです。しかし、そのことが道民の生活にとってもっている意味だとか、そういったことと関わらせてみる視点が落ちています。道のお役人たちが、こういう政策をとったらどうなったかという検証をちゃんとしてくれるといいのですが、私たちの課題なのでしょう。

例えば、戦後北海道における農村のまちづくりの総括を農村社会学者がどうやってきたか、どういう論理で国と道と市町村は“統合”されてきたか、何か複数の可能性はあったのか、そういった検証はされていない。それは、北海道社会学会といったものが、一つのアソシエーションとしての役割を持っているのか、ということに関わっている。僕たちは、この北海道という島に、それこそ“稼ぎ”にきている、何年かしたら帰っていく者としていまを過ごしているのか。

鎌田とし子さんが言っている、「労働者の

子どもは労働者にならない」という指摘。炭鉱労働者の一番の要求は、子どもが大学出て仕事に就けるまで、働き続けさせろということ。それと、死ぬまで怪我しないで働き続けられるようにしろ。その2つが炭鉱労働者の共通の生活哲学でした。沖縄でも東北でも、個人が孤立して暮らしている、あるいは家族しか支え手がない、親族で助け合うネットワークというのがない、ぎりぎりまで存在しない、という状況も存在している。そういうところで人が生きるとすると、“sozialなもの”はどう在るのかとか、個人を助けるはずの社会的・法的諸機構はどう機能しているか、そういう問題が現実にあります。

司会(中澤)：若い我々としては、北海道社会論がなんとか成り立たないかという、その痕跡みたいなものを過去の調査票の中から探し出せないか、というようなことを考えるわけです。例えば鎌田さんがおっしゃったような、社会層というのは一つの手がかりになるだろう。過去の調査票を集めたときに、社会層の北海道なりのできあがり方っていうのが見えてこないか、というようなことを考えているわけです。

けれども、もし今のようなお話なのだとすると、それは一回できてはいるけれども、海辺の波が全てをさらっていくかのように、元に戻っていくような、そういうものにすぎないということなのでしょうか。社会層の間のいろんな関係性みたいなものっていうのも、一世代限りというか、その場限りで消えていってしまう。そういうことなのかなとお聞きしました。

もしそういうことだとすると、ある社会のある時点の像を描き出すという以上の意味はない。それが、グローカリゼーションならグローカリゼーションの中でどういう意味を持つのかとか、あえて古い言い方をすれば主体形成の中でどういう意味をもつのかとか、そ

ういう問題とは結びつかなくなってしまう。北海道を、その特殊性に注目しながら研究するっていうことにはほとんど意味がないと、そういうことになってしまうのではないですか。

小林：そういうことではありません。沖縄だとか北東北だとかいったような、文化の歴史の長いところ、共通の前提といったものが存在しているところに対して、そういう「過去」のないところで、北海道民が互いに支え合いながら、何かを生みだしてきた、その過程と結果の内実を見る必要があります。少なくとも70年代から80年代まで、北海道は「革新王国」だった。“政治的革新”というものと“社会的革新”というものと、両方あったと思います。社会的革新の方は過去のしがらみ・伝統にこだわらない。そのことと政治的革新、社会党王国というのとは、どう繋がっているのかわかりません。すぐに繋がるとも思っていないですが、そういう政治的特質づけは吟味したい。

かつて(村研十勝大会のとき)、島崎稔先生に、北海道には富農がいない、と言われたことを今でも覚えています。全体として貧しいわけです。農家の食べ物一つとっても、みんな貧しいですよ。家計の稼得収入も高くはない。だからといって日常生活も貧しいかというところではないかもしれない。そういう意味で、革新王国であることに或る可能性があるとする、日本国憲法を地域に活かして、憲法を共通文化とした或る社会ができていたのかもしれない。その表出が革新道政なのではないか。実際には、憲法が道民生活の基盤にしっかり入っているとは言えない。ですから、トップの方に政治的革新派が多いこと、社会的革新性がそれなりに強いことがプラス面で、外国の人がこの土地に比較的住みやすい条件の一つになってくる。

その意味では、沖縄のような地域社会では

なく、余所者がみんな集まってきて、異業種交流じゃないけど、いろんな雑種が集まってきたところから、新しく何が作られようとしているのかを見なければならぬ。それを、生活の襞に、生活・労働—生活過程の中に見てみる。同時に、社会的—法的諸機構の特徴としては何かを調査していく。

そうすると当然、北海道の中だけで北海道社会論を議論してもダメだということになる。当然、他との比較が必要になる。例えば、さっき言いましたように沖縄と比較する、すぐ近くの東北と比較する。この文化比較は、宮良高弘さんがすでにちゃんとやっていたことなのです。それを統治文化／統治現象のところまで拡げて、東北と、あるいは西日本と、比較をしないといけない。そして「北海道社会」「日本社会」「東アジア社会」「世界社会」を構想していくという課題があると思うのです。

司会(中澤)：多分日本だけでなくサハリンとかアメリカとの関係も含めて、参照群とか対照群とか見ていかないと実はいけない。それは非常によくわかりました。

コメンテーターの先生方、どうでしょうか。さらに何か反論がありましたら。

小内(透)：先ほど言ったことは、精神をもっと重視せよと言ったと受け取られたのであれば誤解であって、小林先生と同じように、精神を輝かせるためにも新しい枠組みや新しい視点を入れないといけないという考えです。解釈だけでなく対象の選び方もそうでしょう。ただ僕がそういうふうにしたのは、小林先生がそういうお考えを持ちながら、なぜ「グローカリゼーション」という視点でそれに応えようとしているのかがよく分からなかったからです。

先ほどのお話のなかで、労働過程を見ていってもなかなか見えないものがあるだと

か、生活過程を見ていっても多様だということとは分かったけども、そこから一步先へ進められなかった。こういうお話があったあとで、それを乗り越えるためになぜグローカリゼーションの視点なのか。そこがよくわからない。ちょっと難しいかも知れないけれど、そういう現実を踏まえたら、労働—生活過程論や社会機構—構造論のどこに問題があって、どうやれば乗り越えていけるのか。そういうところについて、少しでもヒントがあれば教えていただきたいと思います。

「こっちの方向でうまくいかなかったから別の方法で」というのは、一つの考えだけでも、また同じになる可能性がある。やはり、精神としてはいいという共通認識ができたのだから、それを輝かせる方向で行くためには、労働—生活過程論とか社会機構—構造論とかの、どこに問題があって、どこを突けばいいのかを考えないといけない。はっきりとは言えないと思いますが、このあたりだなということを教えていただければ、私も後に続く者としては心強いなと思います。

小林：例えば、倉敷の調査で三菱自動車の生産・労働—生活過程を対象にした。現代の工場のベルトコンベアラインというのが、いかに人間を分断するものであるか。そして、逆に、直接的労働過程が人間間の共同秩序を作り出す可能性。例えば、QCサークルが、どうすればもうちょっと仕事が楽に進むようになるかという考え、作業姿勢の改善問題を調査するなど、ものすごく盛り上がった。皆さんいろんな創意工夫を出されました。そうして、自分たちが職場の主人公になったわけですね。すると、会社も労働組合も労働者を押さえつけていった。生産過程全体のコントロールができなくなるからです。

当然、こういう状況をどう評価するかという問題が出てきます。そのときの一つの仮説は「資本の文明化作用」みたいなもの。です

から、結局は「資本の論理」なのです。資本によって集められた労働者は文明化作用を受けるので、長期的には事態を改革する。そこに全ての秘密がある、と。しかし、実際はそうではない。そうすると労働者一人ひとりが自分の生産・労働過程と自分の生活過程を、どういう論理で統括しているかが重要になる。

生産・労働と生活とは、時間帯としては拮抗し合っている。だからそういうような実際の生活をしている自分自身を、どうコントロールし、どう統括しているか。そういった人たちがどういう職場を作っているかということ、僕たちは十全には分析できなかった。だから、こういう職場で働いている人にどういう問題があると言うことはできても、そこで働いている人たちが何を捨て、何を大事にして生きているか、というところに入り切れなかった。そのことを「主体形成」という言葉を使わないでどう理解するか。つまり、労働者が自分を支えてきた生活文化をどういったものとして捉えているか、の問題です。

例えば、三菱のベルトコンベアラインで働いている人たちは、その大半が農家の次三男なのです。労働のモデルは母親です。朝早くから夜遅くまで、家族のために働いている。母親がモデルになって、つまり農村の労働倫理がベルトコンベアラインを動かしている。単純作業の典型と言われるベルトコンベアの組立ラインで働いている人が、自分を動機づけていくのは、この仕事が楽しいか、ではない。自分の貰う給料で、子どもたちが労働者でなくなっていくようになるということだ、と思っていたのです。

ところがもう一つありました。やはり自分が「賃金稼得」者だけではなくて「生産労働」者なのだという側面です。自分が働いていて、自分が働いたからクルマができたと思えるということ。そういう観点からベルトコ

ンベア・ラインにおける QC サークルを分析することは、世界の労働社会学会では QWL (quality of working life) が問題ですから、袋だたきされそうだけれども、面白いんです。実際に自分が職場で働いていて、上からホワイトカラーの連中が命令してくるけど、あいつらはこの組み立て作業なんかできるはずがない、口で言うだけだ、実際できるのは俺たち自身なんだ。「奴ら」に対する「俺たち」の、労働の主人公意識というか、そういうものがベルトコンベアラインにもないわけではないのです。こうした主人公意識を資本が握った。つまり QC サークルを通して、もっと生産者としての自覚を持て、と。その姿は資本の論理が工場の末端まで貫徹していったプロセスだと思うのですが、そのどこに生活の論理がでてくるのか。それを労働過程のところから説明しようとしても無理な話だ。それ以前の、労働者になるまでのところ。そして工場を離れたところ、そのところですね、問題は、〔註：もっとも、トヨタと三菱自動車とでは、QC サークルに対する具体の位置づけが異なっているように思われる。〕

小内(透)：やっぱり小林先生は、もともとおやりになろうと思っていたのは、価値意識の問題でしょうか。価値論がキーになっているのかなと思います。

玉野：小内さんが聞かれたことに私が応えるのも変なのですけども、僕が外野からどう見ていたかということを述べたい。今日の話で小林さんが言われた社会的中間集団というのが、生産・労働—生活過程の外側にある何かと位置づけているという感じがしております。僕自身は地域とか都市とかをやっているものですから、その一つとして「地域」というものに注目していたのです。

そういう立場から、布施さんたちがされて

いることをずっと見ていたのですが、布施さんたちの研究のなかで、地域というのは、ずっと「フィールド」でしかないのですね。ある社会的まとまりを持った何かとして扱われることはなかったのです。それがあつた種の不満としてあつて、小林さんがいま実際に語られたことを、小内さんの問いに対する答えとして考えるとしたら、今日小林さんの話のなかで言えば「社会的中間集団」といわれるもので、僕は特に「地域」というのを考えていきたい。

社会機構・構造について言えば、社会機構であり社会構造という側面があるわけだけでも、社会構造とか社会集団って言うとき、それでは語りきれない何か地域的な空間的な背景を持って、それこそいろんな人たちが通つていきながら家族を形成し、残していった、ある空間の中に残された何か。それを文化と言つてしまうのは嫌なのですけど、ある種の目に見える形で蓄積された何かであつて、それが沖縄なら沖縄という表象の中に落ちるのだろう。たぶん北海道というのは、そうではなくてもっと小さい範囲で落ちていると思うのです。

だからいまの時点で、北海道というのはある種の枠としては考えられるけれども、社会的な実体として、沖縄みたいなかたちでは考えられないというだけのことであつて、北海道の中のある地域のローカリティみたいなもののなかにやっぱり残っている。それを社会学は見なければいけないということではないかと思う。さらに言うと、それが際だつてくるのがグローバリゼーションであり、だからグローバルなのだというのが今日の話だつたのではないかな、というふうに僕は理解しています。私が答える役ではないのですが。

まさに、そういうことをやってきたのが古典的な社会学ですから、その遺産をきちつと継承すべきだ。先ほどちょっと小林先生が付け加えたことで、高田保馬を例に言われまし

たが、ゾチアールなものが極めてポリティカルなものとなつて連動しているということに、あまりにも無神経であつた。ある意味で生活という点では、あるいは国家政策としては、社会学はある分野としてやってきたのだけれども、その持っているポリティカルな意味というところまではなかなか踏み込まなかつた。そういう意味で、高田みたいにならないようにしていたということは確かに一つ批判としてあるのかな、と納得いたしました。

小林：前半におっしゃられた、「布施グループにとって地域というのはフィールドでしかなかったのではないか」、というのは相当痛い指摘です。倉敷調査では、農村、漁村、町場、クラブ等、いろんな調査をしました。しかし、その結果として、このマチに入つてきた巨大資本群に対して、共通の対抗軸が何だつたのかという分析がなかつたように思うのです。絶対に在るはずなのにです。例えば、公害に対して…。公害反対を町内会でやつたら、倉敷市が町内会を廃止する、もう使わないと。それに対して反対の運動が起こる。そこでの対抗軸は何だつたのかというような分析はもっと有り得た。

逆に、松下電器の調査をやっているとき、職場労働者の他に職長にも会いにいったのですが、「いまの仕事は大変だ、自分はできるけど、自分の子どもには就かせたくない」、なおかつ「自分は退職したら国へ帰る」と言う。で、「そこで農作業する」と。つまり、松下で働いているということが“出稼ぎ”なのです。本当の仕事はクニにある。生活する時間は短いかも知れないけど、そういうものを持っている人の強さ、そういう地域の強さ、地域の社会的文化的抵抗力の何かつていうものも感じられる。

それは都市になつてもなくなるものでない。ゾチアールなもの、ゲゼルシャフトの中のゲマインシャフト的なものがつくり出すと

ころの或る力である。そのところを全然斟酌しないで、新自由主義的グローバリゼーションばかりが進んでいくと、地域が滅茶苦茶に破綻してしまう。

内田：グローバル化時代の地域社会変動の要因を考える上で、沖縄の伊波普猷をめぐるひとつの論争点に触れておきたいと思います。伊波普猷について、社会変動の原動力を民衆に見ていないとか、労働者に見ていないとか、つまり階級的視点がなという批判を誰もがするのです。しかし私は、そういう視点では社会変動を説明したことにならないような時代になってきたのではないかと考えているのです。

イラクなどは典型ですけど、イラクの社会変動ということで民衆の労働生活過程に入って、ああいう変動の中で職を失った人を生活史分析として、何人やったとしても、イラクがどう変わるかなどということは全く分からない。むしろイラクの民衆の手に握られていないところ、もしかしたらアメリカの大統領選でブッシュが負けた方が大きく変わるかも知れないし、ヨーロッパの国の力がアメリカに対してもっと強くなるとか、イラク以外の人たちが来てアメリカ軍に対してあれだけのテロをやるのが変動要因になっているのかもしれない。

布施先生たちのグループの地域社会研究で生産労働過程をなぜ着目するかっていうときに、社会の変動イコール民衆であるとか労働者であるとかの主体要因によるものという、意識するか否かにかかわらずかなり強い基調があったのではないかなと思います。そこを自明視しない変動要因というものを、きちんと見ていかないといけないのではないかと、私などは思うわけです。

全然関係ないかも知れませんが、個々人の生活史の質的分析ではわからない北海道社会の変動の現状を見る上で、やはり統

計分析なども絶対欠かせないと思うのです。グローバル化の中で、北海道単位として、単なる新自由主義的なグローバル化ではない方向に進む可能性を孕んでいるとすると、実は一見ネガティブな現象かも知れませんが、人口移動の特徴を挙げることができます。北海道というレベルの社会的な人口の移動で言うと、全国一低い。出て行く人も低いし入ってくる人も低い。にも関わらず、北海道内における社会移動は全国的にかなり高い。つまり農村から札幌あたりにかなり集中して、そこから先は出て行かない。

実は私たちの大学の卒業生の進路に関して言うと、圧倒的に学生は第一志望で何を重視するかというと、金とか労働条件でなくて、北海道に、地元に残りたいということです。北海道であればどこでもいいんだと。札幌でもいいし、出来れば地元に戻りたいというのがあるわけです。我々からするとそれはかなり覇気がない姿のように見えるわけです。

しかし先ほどの話からすると、これだけ不況で景気が悪くて労働条件が悪い北海道で、すぐ勤めることが出来ない学生も50%を超えるのにここに残るっていうのは、それをどうするかを真剣に北海道の人たちが考えなければいけない問題ですが、ただ、意識的に北海道社会をどういう風につくっていくかっていう点で言うと、その主体的要因のあり方として重要な動向なのではないかとも考えるのです。

伊波普猷は、地方自治体の政治に責任を持っている人たちのとる政策であるとか志向性であるとか考え方を重視して、そういう所に頼って沖縄社会をどうかしよう、と考えていた。沖縄社会を支配している日本政府の要人の考え方が変わることを願うというのは、社会変動の要因が全然わかっていないからだ、歴史を作るのは民衆だと、労働者だという視点がなと批判されるのですが、しかし北海道を歩いてみて、実は労働者が主体的に

歴史を作っているようには感じられないのです。

例えばこの前「木の城たいせつ」っていうところで、北海道社会をどうするかというシンポジウムがありました。その中で北電の会長だった人が、「実は北海道が衰退しているのは、アメリカ民主主義的なかたちで北海道社会を作ったからだ」と言っていた。アメリカ的民主主義とは何かと言うと、利潤の追求の自由を全面的に規制することなく許してしまえるような民主主義。それを北海道の中で認めたら、北海道がだめになってしまう。アメリカ型じゃない社会を創ろうという提唱をする、と。

それが力になるかどうかわかりませんが、そういう動きを含めてこの北海道の現状をどう認識してどうやった時、北海道社会が変わっていく、そういう意味でのグローバル化ではない、もう一つのグローバル化的な意味のグローバリゼーションというかたちで変わっていくとすると、どこにその原動力があるのかっていうのは、労働者・民衆という前提を外して分析されるべきではないのか、とも思っているのです。

では具体的に北海道の何に着目したらこれからの北海道のあり方が見えるか。そこはまだ掴んでないのですけれども、そういうアプローチの仕方もあるのではないかなと思っています。ですから、調査票である任意の地域を選んで、その地区会長か企業にいて労働者にインタビューして、北海道社会のこれからの社会変動そのものを説明することができるのか。労働者の生活は説明できて、こんな課題を持っている、こんな価値意識を持っていると説明できるけど、それが北海道の社会変動にどうつながっていくのか。それがどうしても僕には見えてこない。そこから北海道社会の変動の方向は言えないのではないかなというのが、強く気持ちとしてあるのです。

小林：北電の元会長の話の続きをします。モデルはデンマークです。デンマークがドイツと争って敗れ、良いところの土地をもって行かれてしまった。そのときに荒地をどうやって開拓するかということで、国民が意見を戦わせて、砂地だったところを農地に変えた。そのバックには、自分たちが生きていくこの国土を、自分たちの手で再生しようという意識を読み取ることができる。これを北海道のライフロンディングの大元に据えよう。そのことによって、誰かが何とかしてくれるだろうという意識でない、もっと主体的な考え方が生まれてくるはずだ。デンマークの民主主義を支えているのは農民だ、と言うわけです。

そうした把握から北海道の産業クラスター創造運動を起こす。産業クラスター創造の第一番目にくるのは農業なのです。ここまでの総論の話はすごくいいわけです。「教育改革北海道会議」〔議長＝北電の元会長〕というものに参加して、こう提案しました。「北海道の18歳の青年にどういう未来を与えるか、それをテーマに社会的な運動をしましょう。18歳を軸に考えれば、いろんなことが全部変わってきます」、と。数ヶ月たって事務局が出してきた答えは、「やっぱり子どもは乳幼児期からみなければいけないから、乳幼児期を大事にしましょう」。それで、その後は付き合いを辞めてしまいました。北海道にしても札幌市にしても、北電の元会長が持っているような危機意識はさらにはないようです。この問題について、労働組合の連合の方にもそういう危機意識は感じられません。連合の組合員をどうするかという視点だけで動いて、言うならフォード主義的労働組合でしかないから、労働に係る社会的・法的諸機構のメルトダウンを気にしない。

山口二郎さんたちが『地方ガバナンス』という本の中で強調する、役人の能力を高めないきゃだめだという話は本当によくわかりま

す。社会変動の理論として見ると、政治学の、現実にはここ10年くらいの間に何をしたらいいかを考えていく学問と、社会学の、もう少し長い範囲でものを考えようという学問とは、思考の様式や手順が違ふと思います。その2つを混同して議論すると不毛になる。それで見ると、さっきサルデーニャの話をしましたけれど、北海道だって「ここにいたい」という強烈な志向がある。それがどういう形で「ここにいられる」ということに繋がっていくか。それに社会的・法的諸機構がどう関わったか。関わってこない旧型の社会的・法的諸機構を何によって置き換えるのか。

失業している人に対する生産・労働—生活過程分析というのは、ある失業者をつかまえて根掘り葉掘りいろんなことを聞いていくことではなく、要するに今の生活を踏み台にしながら今の生活ではないところのものにどう移行できるか。個人の努力でしか移行できないのか、社会集団的なものの力を借りながら移行していけるのか。全体として、万一の時に、もし何かあって失業したときに、自分と自分の家族しかない状態か。そうではないところの地縁、あるいは松下電器の労働者でいえば「職場縁」がものすごく強く効いている。職場縁のもっと奥のところを探っていくと「同じ関西だから」というのが出てくるある共通性。そこところが北海道にはかつてなかったのですが、ないままではありません。

例えば話ですけれど、小樽の或る建築工務店を中心とした建築作業集団が20何名かあって、その人たちは同じ小学校の卒業生、少なくとも同じか隣の町内に住んでいて、日常的には皆なで分担しながら作業しているのですけれども、その他にマチのボランティア活動をやろうということになって、「成人会」というのを作った。廃品回収をしてはお金にするとか、年に1回カラオケ大会で2~300人

集めたり、お祭りの時に子どもミコシの世話を焼いたりしながら、それが生活だと思ってやっている。

「生産・労働—生活過程」の「生活」というものを家族に限定しないで、社会的な生活の過程として、あるいはメディアを使った、インターネットを使った、精神生活の側面を拡充していくことによって、自分が何者であるか、自己意識が変わっていく可能性がある、そういう時代にきていると思います。

司会(中澤)：ありがとうございました。

コメンテーターと報告者の返答が二巡したところで、会場のその他のみなさんもだいぶおききしたいことがあると思いますので、会場の方に話を移したいと思います。ご自由にいままでのやりとりに対して、あるいは報告に対して意見などを受け付けたいと思いますがいかがでしょうか。

いわゆる布施軍団のメンバーとして、札幌学院大学の方から今回は酒井先生と小内先生がいらっしゃっていますから、いかがでしょうか。

酒井：私も、北海道と沖縄、東北との比較論をやりたいと思っています。これは別に沖縄とか東北をダシにしながら日本論をやろうというのではなくて、むしろ北海道を相対化するためにどうするかというときのひとつの手がかり、可能性として考えていきたいからです。ただ、先ほどからでているように、北海道にはアイヌの問題があります。それで、沖縄でもさっき伊波普猷の話が出ましたが、私に言わせればそれらは歴史遡及型の分析であって、東北なら東北としての原点を縄文まで遡って議論する仕方です。北海道でそれに該当するのはアイヌということになりますが、これはこれで非常に北海道を個性的に捉える上で不可欠ですが、それだけで現代の北海道を考えるわけにはいきません。社会学者

の基本的役割は現状分析なんですよ。現代においてそれをどういうかたちで捉え直すか、いまの共時的な軸をどこに定めるか、という問題があると思います。

もう一つは、人口移動の話が出ましたが、私は、北海道は非常に流動性が高い地域だと思っています。確かに、80年代ぐらいまでは人口移動が非常に激しい。もちろん道内の移動も高い。これは開拓以来流動性が高くて、社会的凝集性が低いという特徴があると思います。そういう意味で、クリアな地域形成がしにくい地域だと思われる。

ところがご承知のように北海道では、私は80年代から90年代と思っているんですが、決定的には90年代になって、例の拓銀の崩壊にみられるように、北海道自体はもはや全国のなかでなんらかの積極的な意義を与えられなくなってしまった。それ以前に、様々な大資本が北海道を撤退して、グローバルに展開していく。従来あったような、国の責任でそれを統治しようという意図から離れていく。自前で何とかすべき問題が出てきます。

そうってから本当にまだ時間があまり経っていないけれども、構造的には不可逆的にそういう段階にきています。そういう意味で北海道をどう再構成するのか、どういうふうにそれを見直すのかという問題は、その変化を踏まえてやらないといけないと思います。北海道の現状論を開拓時代からの連続で考えてはいけません。国家的・全体社会的な中での位置づけの変化を無視することはできない。そういう意味ではグローバリティの問題は、大なり小なり直接影響あると思います。ただその中で、私は、ここ10年ぐらい道内のあちこちを回ってみると、やはり質的に変わってきているという感じを強く受けるのです。

新しい社会形成をするような動きがあちこちで増えています。それをどういう意味として捉えるか、あるいはそれをどういうかたち

で定着させて社会形成につなげるのか、あるいは北海道の特徴になるのかは、今はよく分かりません。しかし、20年くらい前とはまるっきり違う問題がどんどん出てきています。ただ、それを目的意識的に掘り下げて、担い手たちの背景とか社会的基盤を掘り下げながら理論化するなり整理するなり、そういうことがまだ遅れていると思います。残念なことに、北海道を対象に研究する人があまり北海道にいない。本州からくる人の方が最近北海道に対する興味が強くて、学会に行くとギャップを感じる時がある。やはり私達ももっと意識的に北海道をまわってその動きをフォローしなければいけないと思います。

もう一つ、我々は調査をやっているとどうしてもある枠組みでものを考えようとしてしまいます。そこには、いまこうであるということだけではなくて、どういうものを作っていくという問題があります。小林さんのライフロングラーニング論の主題は、それをどういう方法で作っていくか、そここのところにあるのではないかと思います。それを学者があらかじめ枠組みを作ってその文脈に沿ってやればいいというのではなくて、今生活している人たちの現実の活動がある程度経験的に踏襲しながらそれを提唱していく。そういう相互関係がもっともっとつくられてもいいのではないかと。そうすると北海道だってもっと刺激を受けるようになると思います。

それは布施さん方が昔苦労してやってきたことをただ踏襲すればいいのではなくて、それはそれとして踏まえながらも今を見る目を新しく付け加えて、批判的にふまえていくことを私は期待しています。

小内(純)：布施グループでの議論を思い出しながらうかがいました。結局、生産・労働—生活過程分析と構造—機構分析がなぜ結びつかなかったかを考えると、実際に結びついていなかったからだろうと思っています。ま

た、その捉え方がおかしい部分もあったのだろうという風に考えています。例えば、労働・生産—生活過程といった場合、当時の時代的背景にも規定されると思うのですが、どうしても労働現場とか生産現場を中心にみてきた。しかし、最近の NPO の活動などを見ていくと、生活の分野から力を付けてきて、それが逆に自分の労働を捉え直す契機になっていたりするわけです。生産・労働—生活過程の分析の仕方というのも、一つは問題があったのではないかという気がします。

そして、「機構化」することを常にプラスに捉えていたという点もあると思います。最近「機構化」にはマイナスの面があるということを感じています。多少市民活動に関わっていると、本当に古い団体が協議会を作ったりすると、あまり生産的でない議論に終始したりするわけです。機構化の持つマイナス面への視点も抜けていたのではないかなと思います。

もう一つ全体の議論を聞いていて感じた点は、一般的になんとなく「北海道社会」というのが否定的なニュアンスで語られていたような気がするのですが、それはあまりにもステレオタイプにとらわれすぎだと考えています。例えば NPO の数だって全国的にみたら多いし、その中には全国的に影響を与えているような活動も出てきている。私はコミュニティ FM というラジオの研究をしているのですが、北海道には 16 局あって、更に 2 局今年中にできる。そういう積極的な面もある。意外とよく見たら頑張っている部分もあるのではないかと、そういう風に考えています。

以上、聞いていてなんとなくひっかかっていたところです。

司会(中澤)：ありがとうございました。若い人を代表して西城戸さんいかがでしょうか。

西城戸：この長時間の議論を踏まえると、もう一度さまざまなことを咀嚼しなおさなければならぬと思いました。

例えば、あるフィールドワークをするとき、ある理論的な課題を踏まえて、ある時点や地点の社会のリアリティを再構成しながら、その一方で現場の問いに答えていくことをしなくてはいけないと思うのですが、そのような調査をするために何をしなければならぬのかという議論を組織的に準備して行わなければいけないと思います。小林先生のレジュメに、「多大な創意」という言葉がありますが、いくつもあるこのアイデアを、ではどこから攻めていくか、誰がどういう風にやっていくのかという点を、我々若い者だけがというのではなくて、様々な世代が実質的にしないといけない。

さらに、ある地域のリアリティを描くということにとどまらない、ある種の一般性、ないしその一般性を踏まえた上での地域の特殊性という議論に我々社会学者は関心があるわけで、ただそこまで議論を進めるには、個人でやっていくのはなかなか大変で、組織的にやる必要が実はあるのではないか。やるべきことはかなり多いなということを今日のシンポジウムないし先生方のお話を伺って感じました。

司会(中澤)：ありがとうございました。

今回のワークショップでいただいた、いろんなご指摘とか課題とかを整理して、来年度以降、西城戸新事務局長のもとで、SORD の方では今までやってきたこととは少し違う、北海道っていうところを軸にしたデータベースの作成の作業に入っていきたいと思います。引き続き北海道内・道外を問わず、皆様方の様々なご支援をいただきながら地方分散型のデータアーカイブとしてやっていきたいと思っておりますので、今後とも是非ご協力を頂ければと思います。

今日は遠いところ、また、一日かけて時間を
とっていただきまして、小林先生、それから
コメントーターの3名の先生方、皆様どう
もありがとうございました。